

生きる道を開く 自殺予防最前線・秋田（５完）／脱「無関心」

2007.02.21 河北新報記事情報 写有（全152字）

生きる道を開く 自殺予防最前線・秋田（５完）／脱「無関心」

住民自ら「一歩ずつ」

昨年10月、仙北市田沢湖町で開かれた地域交流行事で、地元の素人劇団が初舞台を披露した。テーマは「自殺予防」。歌声酒場「希望」のママが、生きる希望をなくした客の相談に乗り、客が気を取り直していく - という内容だ。重苦しいテーマだが、ギャグや演歌の合唱が盛り込まれ、客席の80人の住民は笑い、涙し、感動を共有した。

この「大根劇団」のメンバーは地元の主婦や会社員ら8人。脚本を書き、演出を手掛けた自営業津島順二さん（59）は「自殺率全国ワーストが続く状況に、もう平気ではいられない。やれることをやらなければ」と寸劇に込めた思いを語る。

津島さんは中学卒業後、集団就職で上京。2000年、37年ぶりに帰郷した。しばらくして、自殺に対する古里の「無関心さ」に、違和感を持つようになった。

< 知人の死に衝撃 >

きっかけは、子どものころ一緒に遊んだ知人の自殺。何でも話せる友人はいなかったのか、相談できれば違ったのではないか。身近な自殺の衝撃は大きかった。その後も、住民が自ら命を絶ったとの知らせが舞い込む。

だが、周囲はどこか冷め、人ごとのよう。貧しくも楽しく、助け合っていた地域はもはやなかった。個々の生活が中心となり、人とのつながりや相手への思いやりは薄れていた。「人に無関心な人は、自分の命も粗末にしてしまう」。津島さんは訴え続ける。

< 対策必要性訴え >

自殺予防対策の必要性をどうすれば地域に広め、浸透させられるか。横手市の保健師渡辺睦子さん（51）も頭を痛めている。合併前の旧大森町で03年度から3年間、県の自殺予防市町村モデル事業に取り組んだ。同居する家族のいる高齢者の自殺が目立ち、地域交流やうつ度調査など、心の健康づくりに力を注いだ。

偏見の強かったうつへの理解が深まるなど成果はあった。しかし、住民の自発的動きにはつながらない。「保健分野だけで自殺は防げない。職場などさまざまなところで行動を起こさないと難しい」と渡辺さんは言う。

大仙市の「薬局すばる」の畠中岳さん(39)は、薬剤師の立場から自殺予防にかかわろうとしている。相談機関などを明記した県の広報誌を薬局に置き、孤独を感じる人たちに相談先の選択肢を増やしてもらうことから始めた。

< 中継地点になる >

昨年、過去数年分の薬歴簿を調べてみた。旧大曲市の自殺者数は年に10人程度。その中には薬局を利用していた人も含まれていた。うつの兆候があっても、精神科を受診していない人がいることにも気付いた。「自分は原因を取り除けないが、精神科や保健所とつながり中継地点として手を差し伸べられる」と、畠中さんは力を込める。

昨年12月1日、秋田市で開かれた「自殺対策新時代フォーラム」。主催者の一人で、自殺対策基本法の制定にも尽力したNPO法人「自殺対策支援センターライフリンク」(東京)の清水康之代表は、結びつきの大切さを訴えた。「一人一人が一步ずつ踏み出せば、(自殺予防は)社会全体として大きな歩みになるはずだ」(秋田総局・坂井直人)

< 自殺対策に関する秋田宣言 > 昨年12月の「自殺対策新時代フォーラム」で採択された。地域の自殺対策の基本姿勢を、(1)個人の問題から社会の問題へ(2)支え合いと共生の社会の実現(3)参画と連携を重視する - と明確にし、地方公共団体が取り組むべき課題を示した。さらに、誰もが安心して生活できる社会の実現に向け、すべての人が行動を起こすよう求めた。

【カラー写真】「自殺予防」をテーマに熱演する「大根劇団」。自殺に無関心でいいのか - とのメッセージを込める

河北新報社